

カナダブリティッシュコロンビア州森林の持続可能な 経営についての考察

八木俊彦*

平成8年6月24日受付

Studies on Sustainable Management of a Forest in the Province of British Columbia, CANADA

Toshihiko YAGI*

Today the realization of sustainable forest management has become the world-wide important problem. Many studies of realizable possibility of sustainable forest management are made of a tropical forest but a few of other forests. Therefore I studied the realizable possibility of sustainable forest management of the temperate forest in the Province of British Columbia, CANADA. The results are summarized as follows:

- (1) That temperate forest contains world-wide giant-tree forest and supplies many wood products in the country as well as for parts of the world.
- (2) This forest is being developed since the later 20th century and produced many unsatisfactorily-restocked areas.
- (3) Today the disappearance of many unsatisfactorily-restocked areas and the realization of sustainable forest management is demanded.
- (4) The solution of these problems is considered to contribute the realization of sustainable forest management in a temperate forest.

1 目的と方法

1992年に開催された「環境と開発に関する国際連合会議 (UNCED, 地球サミット)」で採択された「すべての種類の森林の経営, 保全及び持続可能な開発に関する世界的合意のための法的拘束力のない権威ある原則声明 (森林原則声明)」により, 持続可能性の観点より世界の森林の取り扱いに関する原則が史上初めて合意された。

さらには同会議で採択された「アジェンダ21 (21世紀に向けた環境と開発に関する行動計画)」の「第11章森林減少対策 (chapter 11 combating deforestation)」で, 森林原則声明の原則を実現するための行動計画が作成された。これらの原則と行動計画は各国の考えや利害を反映し, 多数決ではなく合意により形成されたために複雑で曖昧な点もあるが, 持続可能性の観点から, 森林の取り扱いの世界的合意の実行を促進しようとする意義は大

*鳥取大学農学部農林総合科学科森林生産学講座

*Department of Forestry Science, Faculty of Agriculture, Tottori University

きいと評価されよう。

この世界的合意が各国で実行されるか否かが注目されるが、その点検は地球サミットで設立されることになった地球サミットのフォローアップ機関としての「国連持続可能な開発委員会 (UNCSD)」により行われている。1995年には第3回UNCSDで森林問題が集中的に検討され、その結果、地球サミットの世界的合意が各国で思うようには実行されていない事が反省され、実行を促進するために「森林に関する政府間会議 (IPF)」が設立されることになった。現在 (1996年)、世界の森林が持続可能な取り扱いをどのように受けているかは、このIPFが中心になって検討を行なっている。IPFの会議は今日 (1996年6月) までに2回開かれていたが、日本の政府代表者に会議の様子を聞くと、あまり進展がないとのことである。

以上の経過は、世界の森林を持続的に取り扱おうとする国際政治の積極姿勢を示す動きとして評価されるが、反面、持続可能性の実現が困難である事を物語る経過と見なされる。したがって、この困難を解明する事が、今日においてはきわめて重要であると考えられる。

本研究では以上のような問題意識にもとづき、世界の森林の持続可能な取り扱いの困難性を若干ながら解明する事を目的とする。この目的を達成するために、従来の国際政治が殆ど熱帯林問題に焦点を絞った他の森林問題を軽視してきた姿勢を反省し、温帯林の持続可能な取り扱いに重要な問題を提起していると考えられるカナダブリティッシュコロンビア州 (以下B.C.州と略記) の森林問題を検討することにより、世界の森林の持続可能な取り扱いの困難性を解明するという方法を採用する。

2 世界の森林の持続可能性に関わる状況と問題

カナダB.C.州の森林問題を検討する前に、従来の国際政治が熱帯林問題に焦点を絞った他の森林問題を軽視してきた経緯を見ることにする。世界の森林の持続可能性に関わる状況と問題が明確になり、本研究で扱うカナダB.C.州の森林問題の世界的意義も明確にしようと考えるからである。

世界の森林の持続可能性が問題として提起されたのは、1970年代から顕著になる熱帯林の減少問題の解決をめざしての事であった。世界の全ての森林については減少していない。

1980年代には国連食糧農業機関 (FAO) や世界銀行

などの国際機関が熱帯林減少問題を取りあげ、FAOは熱帯林行動計画 (TFAP) を作成し、国連貿易開発会議 (UNCTAD) は国際熱帯木材協定 (ITTA) を採択し、国際熱帯木材機関 (ITTO) を設立した。このような熱帯林減少をめぐる国際的とりくみは、深刻な減少の実態が急速に明らかにされるにつれ、さらには熱帯林の地球環境に果たす役割 (温暖化防止や生物多様性保全など) の重要性が認識されるにつれ、一段と強化されていった。

1990年にはITTOの理事会は「西暦2000年までに持続可能な森林経営が行われている森林から生産された木材のみを貿易の対象とする」という戦略目標を採択し、1994年にはそのためのガイドラインを作成した。

他方、1992年の地球サミットの準備作業では、熱帯林減少を防止するために国際条約を制定すべき、との主張も根強くなされたが、熱帯林所有国からの反発が強く、結局、地球サミットでは世界の全ての森林に適用される法的拘束力のない森林原則声明を採択することになった。

しかしながら、これらの国際政治における議論と合意形成は平坦なものではなく、合意困難な難問を含むものであった。とくに、1972年の国連人間環境会議の宣言や国際法で国際的合意として認められている、自国資源を開発する国家主権を熱帯林諸国のみで制限する問題と、熱帯林以外の森林の現在のみならず過去の森林減少や森林劣化の国際的責任問題が難問として議論され続けている。自国資源の開発主権と地球環境の保全とを熱帯林のみならず、世界の全ての森林でどう調整するかという問題と、過去における森林の減少と劣化の国際的責任をどう考えるかという問題である。

現時点では、これらの問題を真に解決する国際的合意の根拠になる科学的知見と政治見識は、きわめて不足している。その根本原因は南北問題の解決と森林減少・劣化の科学的歴史認識の発展が困難な点に求められよう。

以上、簡単ながら世界の森林の持続可能性に関わる状況と問題を見てきた。その結果、熱帯林のみならず他の森林の持続可能性に関わる状況と問題を解明する事の重要性が明らかになったと思う。このような観点より、以下、熱帯林以外の森林で経済的にも環境的にも世界的な重要性を有すると思われるカナダB.C.州の森林について若干の考察を行う。

3 B.C.州森林の開発と保全の動向

(1) B.C.州森林の開発動向

B.C.州はカナダ西南部に位置し、'94年現在、州面積95万km²、森林面積60万km²と森林に恵まれた州である。森

林以外の天然資源にも恵まれ、石炭・石油・天然ガス、銅・金・亜鉛などの鉱物資源、さらにはサーモンなどの海洋資源がある。したがって、州の経済はこれらの天然資源に依存し、林業・林産業は最も重要な産業となっている。したがって、B.C.州の森林は、近年の世界的な木材需要の増大と自由貿易の発展の下で、開発が加速され、保全との調和が失われやすい状況にあるといえよう。

ここでは、B.C.州森林の近年の開発動向を見ることにする。主たる森林開発としての伐採の動向は、年間伐採量で見ると'61年3200万m³、'82年6094万m³、'87年9059万m³、'89年7800万m³と'87年まで急増し、以後若干減少している^{1,6)}。'87~'91年の5年間における年平均伐採量は8340万m³と、従前に比し殆ど減少していない⁶⁾。この伐採量は森林保全から見ていかなる意味をもつであろうか。森林保全の一基準と考えられる年間許容伐採量（年間の森林蓄積成長量から枯死や山火事等による被害量を差引いた量）で検討すると、年間許容伐採量が6000~6200万m³程¹⁾と推定されるので、明らかに過伐という事になる。森林保全を量的に危くする動向と理解される。

その他の森林開発の動向として、石炭・石油・天然ガスなどの森林内での開発が進み、森林の減少や環境悪化、先住民の生活侵害を発生させる動向がある。筆者が現地視察した地域はB.C.州ではなく、東隣りのアルバーダ州内の地域であったが、カナダ全土にわたり、このような動向と問題があるとの事であった。森林保全のためには、長年、森林と共生し、森林の開発と保全を調和させる知恵を育んできた森の先住民や地域社会を尊重すべきと考えるが、今後の調査・研究と対策が望まれる。

(2) B.C.州森林の保全問題の動向

B.C.州の森林のみならず世界の全森林について、保全という事が課題とされる今日であるが、その定義は明確ではない。熱帯林で問題にされる面積の減少を防ぎ維持する意味であり、近年、多様化・高度化してきた機能の低下を防ぎ維持する意味でもあり、生態系の維持や木材生産の保続（サステインドイールド）でもあるようだ。これらの定義や意味は、今日、国連の持続可能な開発委員会（CSD）で明確にされようとしているので、その成果を期待したい。ここでは、先程、列挙した意味全てが関連し合っていると考えられるので、それらの全てを尺度にして考えることにする。

B.C.州森林は、前世紀後半より開発され始め、無尽蔵とも思われた豊富な蓄積は徹底的に伐採され収奪されて行った。森林の殆どを占める針葉樹林は比較的再生力が強く、天然更新による低コストな伐採跡地の更新が長

期間続けられた。1947年に至り、森林法が改正され、森林資源の保続という考えが初めてとり入れられた。しかしながら、この考えも伐採の保続に重点があり、伐採跡地の更新方法については変化はなかった。

その後、'60~'70年代には森林開発は内陸部へと進み、大規模化し、伐採権や林地管理権が大手企業に集中し、大企業の発言力が強まった。この頃より、伐採計画の作成や事業実行での非保続的経営が目立ち始め、'70年代後半に全国的な資源調査が行われた結果、約300万haの更新不良地（Unsatisfactorily restocked area .URA）が確認された。この結果にもとづき、州政府が遅まきながら森林保全を考慮するようになり、伐採許容量や企業への伐採量割当方式を見直し、造林投資を拡大して資源の維持・造成にとりくみだした²⁾。

以上より、B.C.州森林の保全は、'70年頃までは殆ど考慮されず、近年ようやく木材生産の保続という観点より考慮されるようになったと理解される。その後、世界的な自然保護・環境保全の高まり、とくに隣接地アメリカ西海岸におけるそれらの高まりの影響を受け、最近では木材生産以外の機能を保続させようと動き出している。

4 更新不良地の問題

(1) 公的資料の示す問題

上述の更新不良地の実態と問題について言及した資料³⁾によると、概ね次のようである。

① '80年時点で300万ha存在し、カナダ全体では2200万ha存在する。これらの内訳はB.C.州については知りえないが、カナダ全体では面積比率で、伐採跡地8%、火災跡地その他40%、未調査地52%となり、未調査地が過半を占めている。

② その後、主として人工造林により解消に努め、かなり解消されつつある。その根拠の一つは、'70年代より人工造林面積を拡大し、その年間平均面積は、'75~'79年6万ha、'82~'83年8.3万ha、'89~'93年20万haとなっており、現在では伐採面積と同規模になっている事があげられる。

大体以上のとおりである。一見、伐採跡地は人工造林により更新されつつあるかのような説明である。しかしながら、今日問われている森林保全の課題から見ると、このような人工更新は単純にして粗雑な解消策であり、重要な問題が含まれていると思われる。次に述べる筆者の現地視察の体験にもとづく見解において、その問題とは何かについて考察してみよう。

(2) 現地視察の示す問題

公的資料によれば、更新不良地は人工造林の拡大により減少し、問題は解決されつつあるかのようなのである。しかしながら、更新不良地の実態に関する資料はきわめて不足しており、真の解決策を考える判断材料が決定的に不足しているように思われる。先に見たカナダ全体の更新不良地の内訳で、未調査地が52%も存在する事がその根拠になろう。この点で、B.C.州も例外ではなからう。

筆者らのツアーグループ（熱帯林行動ネットワークやカナダグリーンピースなどのグループ）は、更新不良地の視察を近年、エコロジスト達により「世界最悪の森林破壊現場」として非難されたバンクーバー島クラクワットサウンドと言われる森林地域で試みた。ここの森林は、地元の巨大木材産業資本マクミランブローデル社が伐採したもので、今までは伐採現場を見せなかった。しかしながら、今回初めて我々に公開し、貴重な現場を見ることが出来た。その時の光景は更新不良地という語ではとても表現できるようなものではなく、荒廃・破壊の極みとでも表現すべきさごとであった。延々と続く林道を数km歩き視察したが、大規模にわたり更新の気配は全くなく、地肌がむき出しになった所も多く、この世の地獄とも感じられた。

そして、関係者からの聞きとりによると、森林破壊のみならず生態系の破壊による生物多様性の喪失、例えばサーモンの減少や、先住民の生活と権利侵害なども生じ問題化してきたという。さらに、ここのみならず他の森林の様子も見するために、セスナ機に乗り、上空から視察した。やはり更新不良地と思われる所がかなり見られた。このささやかな体験と、他の日本の研究者の同様な体験談、さらにはシェアクラブの「クリアカット」という写真集による同様の地域紹介を総合して考えると、先の公的資料の示す問題は、深刻と思われる。

5 B.C.州の持続可能な森林経営の世界的な意義

以上、簡単ながらB.C.州の森林の持続可能性に関する重要な事実と問題について見てきた。ここではそれらの事実と問題について1・2で述べた観点より、世界的な意義を考察する。

(1) 環境的な意義

B.C.州の森林については、ここまでは州全体の伐採と更新の動向と、非持続的な大規模伐採の事例について述べてきた。ここでは、これらの森林の取り扱いが環境的にいかなる意義を有するかを、考えてみたい。そのために、まず、B.C.州森林の環境的特徴を、このテーマ

に詳しい小島寛の著書⁵⁾や諸論文によりながら見ていく。

カナダ南西部に位置し、太平洋沿岸とカナディアンロッキーの地域を大部分とするB.C.州は、恵まれた気象・地形・地質などにより、世界でも独特な森林を発達させ、今日においてもそのような森林をかなり残している。特に注目されるのは、世界屈指の巨木の森といわれる太平洋沿岸針葉樹林バイオーム（広域生態系）である。このバイオームは北米大陸の太平洋沿岸に沿って走る、全長約1600キロメートルの海岸山脈（コースト山脈）の西斜面に発達したものである。北米大陸の西海岸にみられるので西岸性針葉樹林とも呼ばれている。

森林を構成する主な樹種がトガサワラやツガの類、ヒノキやクロベの類などの温帯性のものなので、このバイオームは温帯性針葉樹林とよばれることがある。また、きわめて雨の多い気候の下に発達しているので温帯多雨林地域ともよばれる。低地においては、主にダグラスモミ、アメリカツガ、アメリカネズコ、カスケードモミ、シトカトウヒなどが森林をつくっているが、標高が増すとミヤマツガやアラスカヒノキがあらわれる。これらはいずれも巨木になる性質があるが、ことにダグラスモミやシトカトウヒは世界屈指の大木になることで知られ、バンクーバー島には現在でも標高80~95mの巨木が残存している。

このバイオームは、主な樹種が温帯性のものであること、森林の生産性がきわめて高く樹木が大きいことなどによって特徴づけられる。そして、これらの特徴をもたらす最大の原因は、日本近海を洗う黒潮暖流のカナダ西海岸への流れが生み出す温和湿潤な気候である。さらに、このような気候は土壌にも影響を与え、豊富な降水は土壌中の栄養塩類を洗い流し、養分の少ない酸性の強い土壌を広く発達させた。この酸性の強い土壌は広葉樹より針葉樹の育成に適しており、これが針葉樹林の成立をさらにうながす。

以上のような気候や土壌などの下に、ダグラスモミ・アメリカツガ・アメリカネズコ・シトカトウヒなどの巨木針葉樹が育ってくるが、この中で最も成長が速く大木になり、林業的に重要な樹種はダグラスモミ（米マツ）である。そのために太平洋沿岸部ではこの樹種が最も広く使われている。しかしながら、この樹種は耐陰性が低く日陰では成育できない。森林の成熟と共に林内ではダグラスモミの樹種は育たず、アメリカツガやアメリカネズコが育ち始め、やがってはこれらが安定状態（クライマックス）に達する。この期間は約1,000年以上かかると考えられている。にもかかわらず、未だにダグラスモ

ミの純林が多く存在しているのは、山火事や伐採、風倒あるいは病虫害さらには山くずれなどがダグラスモミ林を成立させるからである。つまり、さまざまな森林の破壊がダグラスモミの繁栄に役立っているのである。

もう一つ特徴的な樹種はシトカトウヒである。塩分の多い海洋沿岸に美事な巨木林として分布している。ダグラスモミと樹高を競い100メートルに達するものもあるという。このような巨木が普通の樹木は育たない環境で育つ秘密は、塩害を起さず塩風の供給するマグネシウムなどの養分をたくみに利用できる点にある。海の恵みで育つわけである。

以上、小島覚の研究成果によりながら、B.C.州森林の主要なものの環境的特徴を見てきた。この特徴を今日の世界の森林の持続可能性の重要性という視点より考察すると、次のようになろう。

① 世界屈指の巨木林、未開発のオールドグロス（老齡樹）林、ウィルダネス（wilderness, 原生自然）をかなり残存させている森林である。これらは世界的に貴重な自然環境であることはいままでもないが、とくに小島覚がいうように世界最大の暖流が地球北半球の高緯度沿岸地帯に、世界に稀な大原生林を発達させ、その森林が今日まで奇跡的に残存している事実は、複雑微妙な地球環境を知る上で貴重な手懸りを与えるものである。

② この貴重な手懸りは、人間が自然とどう関わるべきかについても重要な解答を与えるものと期待される。近年、世界的な問題になってきた人間と自然との関係のあり方、つまり環境倫理を明らかにするのに、B.C.州森林のそれは熱帯林とは異なる倫理の必要性を示唆していると考えられるからである。

熱帯林をめぐる環境倫理は、利潤追求を目的とする商業伐採や生存のための森林開発などが森林の激しい減少と劣化を招く問題の解決策として問われている。そこでは殆どの熱帯林所有国の深刻な貧困のために、世界の貴重な自然環境としての熱帯林の保全は、解決目標にはなり難い。少しでも減少と劣化を食い止めたいというのが、現実的な目標になっている。

一方、こちらでは近年の大規模伐採や森林開発のみを問題として環境倫理が問われている。世界的に貴重な自然環境にできるだけ手をつけないという厳正保存の考えから、大規模な皆伐に反対という保全的な考えまで様々であるが、過去の伐採や開発の是非は問われていない。熱帯林と異なり北側諸国（い

わゆる先進国）に多い温帯林は、太古より森林破壊が進み、最近になってようやく減少が止まってきた。そのために、一見、熱帯林のような激しい減少問題は無くなったかのように見える。しかしながら、森林を例にして人間と自然との関係のあり方を根本的に考えるには、この関係を人間中心的に大きく歪めてきた温帯林の過去に眼をつぶってはなるまい。

B.C.州森林はこの点、森林破壊の開発は19世紀後半に始まるきわめて浅い歴史と、数千年以上と推定される先住民と森林との共生の長い歴史とを合わせもっている。他の温帯林のはるか昔の森林減少にくらべ、人間と自然との関係を問い直し、変革が可能な状況にあると思われる。このような意味でB.C.州森林は、熱帯林の環境倫理とは異なる、過去の森林減少を反省し、人間と自然との関係を変革する環境倫理の素材を提供してくれる世界的意義を有すると考える。

(2) 経済的な意義

この点については3で一応の考察を行った。ここでは今日、世界で議論されている森林の持続可能性の経済および社会の問題との関連で考察を行う。

森林との関係で経済や社会の持続可能性をどう理解するかは、今の所、世界共通の理解は存在しないと思われる。(1) で見た環境としての持続性は、生態系や現在の状態あるいは貴重なものを持続させるという共通理解が得られるであろう。現に、森林の持続可能な経営を評価するための基準作りを検討してきたITTOやヘルシンキプロセス・モントリオールプロセスの基準（クライテリア）の多くも生態系に関わるものである。例えばモントリオールプロセスの基準では、全部で7つの基準の中の5つは森林の物的側面を、森林の生態系の健全性の維持という観点から評価しようとするものである。

社会・経済などに関わる基準は、加藤隆によると次のとおりである⁴⁾。

基準6 社会の要望を満たす長期的・多面的な社会・経済的便益の維持及び増進

基準7 森林の保全と持続可能な経営のための法的、制度的及び、経済的枠組み

これらを簡単にいえば、基準6は社会経済的便益の基準であり、基準7は制度的枠組みに関するものである。このように全体の中での位置は今の所低く、内容は項目羅列的で具体性に乏しい。今後早急にこれらの明確化が望まれる。

モントリオールプロセスの森林の持続可能性に関わる

基準作りにも見られるように、社会・経済的な持続可能性の評価は単純ではない。しかしながら、基本になるものは木材などの林産物を持続的に供給する経済的便益と、地元地域社会の生活要請に持続的に応える社会的便益の二つであろう。ここではB.C.州森林の主たる役割になっている前者について考察を進める。

先に見たように、B.C.州森林は世界有数の木材資源となっている。そこから、近年では年間8000~9000万立方メートルの素材が生産され、その殆どが製材品に加工され輸出されている。その輸出量は世界一を誇るカナダ製材品の6割余を占め、スエーデン一国のそれをもしのぐ。したがって、B.C.州は世界一の製材品輸出地域である。ここでの木材生産という森林経営の持続可能性をめぐっては、先に見たように従来の木材生産の持続性つまり収穫の保続（サステインドイールド）が問題視され、議論になっている。その近年の経緯はすでに検討したので、根本にある問題を見てみよう。

B.C.州の林業政策は木材生産の持続性を考慮し、森林資源の成長量の範囲内での生産を目標にしてきた。しかしながら、この目標よりも州の経済で最重要な地位を占め、カナダ林産業でも同じ地位を占め、世界有数の林産業の地位をも占める地元の林産業の保護・育成を優先せざるをえないため、木材生産の保続や森林資源の保続は軽視される事も生じる。例えば、近年の製材品やパルプなどの国際競争の激化により、立木価格を超低価格に設定したり、過伐におちいる事などが生じている。いうまでもなく、森林資源や木材生産の持続性の基礎は、森林の生態系や成長量であり、木材の供給能力である。林産業や木材の需要量は基礎にはなりえない。この木材の供給と需要の関係は供給側の事情により調整する事が原則である。

この原則が需要側の事情により歪められ、木材供給における乱伐や過伐におちいる例は世界各国で見られるが、B.C.州でも近年では森林資源の成長量を天然更新や人工造林により拡大し解決しようとしてきた。戦後のわが国の拡大造林政策と同様の政策である。そして現在、その成否が世界的に注目されている。先に見たように、更新不良地の解消と新しい更新方法が模索されている。現在では従来の天然更新重視の政策を人工更新重視の政策に転換し、人工造林に力を入れている。筆者の聞きとりでは、ロッキー山脈の人工造林の日給が、1994年時点で2万円という驚くような高い例もあった。この極端な例は、森林資源の持続には人工造林という方法を用いると、更新のコストが増加する問題を問いかけている例と思わ

れる。

このような経緯は、森林経営の持続可能性を経済面に限っても、単純には現状を変革できない困難を示唆していると考えられる。B.C.州の林産業のように経済的地位がドル箱的に極端に高い場合、このような関連産業に地元の森林が対応するには、森林資源の持続すら難しくなり、まして森林生態系の持続はさらに難しくなりがちである。木材生産のための森林資源の持続という限定的目標を達成するだけでも、従来のコストを大幅に上回るコストが必要と思われる。つまり、従来以上の高コストを費やして、木材資源としての森林資源を持続させるだけでも多くの困難が予想される。そして、この高コストを誰がどのように負担するかも問題である。

このコスト負担は、手束平三郎が述べているように⁷⁾、従来は「再造林等の更新作業は原則として従来から伐出ライセンスの取得者に義務付けられていたが、一部は州直営で、特に近年カナダ全体で問題化した更新不良地URAについては、85年から5ヵ年計画で連邦の半額助成が合意され、B.C.州では3億ドルの事業計画が発足している。また、87年秋の立木代引上げの措置に伴い、ライセンス保有者の更新義務は法的にも確定され、強化されることになった。」

その後の経緯の詳細は知りえないが、先の人工造林の日給事例から推察すると、今日では森林更新のコストはさらに増加していると思われる。今後はライセンス保有者の更新義務が正しく遂行され、大面積にわたる更新不良地の更新が州や連邦の努力により成功するのに必要なコストが明らかにされ、負担方法も明確化されねばならない。先に見た更新不良地の大きさと更新の難しさを考えると大変な高額が予想される。果たして、このコストは負担しうるのであろうか。きわめて難しそうである。

以上のB.C.州森林の持続可能な経営に関わる経済的側面の事実は、次のような世界的な意義を有すると考えられる。

世界屈指の木材資源に恵まれ、世界有数の林産業を発達させたB.C.州においてすら、森林の持続可能な経営を実現する事は木材生産のみに限定してもかなり困難であると考えられる。まして、世界全体ではより一層困難と考えざるをえない。市場経済や貿易の自由化と規制緩和が叫ばれる今日にあって、森林経営をこのような資本の論理に委ねるならば政策的援助は弱くなると考えられるので、持続可能な経営の実現はさらに困難になろう。B.C.州は森林経営への政策的援助がきわめて手厚い事で知られている。それでも困難を来たしているのである。

つまり、資本は森林の持続可能な経営を実現する性格を有していないと理解される。したがって、森林の持続可能な経営を実現する政策が必要になり、その政策はB.C.州やカナダ連邦という国内地域や一国というレベルのみではなく、国際レベルのものが必要になってきたと考えられる。世界の森林も同様な国際政策が求められていると考えられる。このような国際政策の必要性を、B.C.州森林の持続可能な経営に関わる経済的側面の事実は物語っており、この点に世界的意義があると考えられる。

引用文献

- 1) 榎戸勇：木材業者の見る木材価格と森林資源問題。林業経済, 543 19 (1994)
- 2) 加藤隆：林政学, 半田良一編, 文永堂, 東京 (1990) PP.244-246
- 3) 加藤隆：欧米諸国の森林・林業。森林政策研究会編, 日本林業調査会, 東京 (1988), PP.294-296
- 4) 加藤隆：基準6, 7：社会・経済的、制度的側面の評価。森林科学, 17 51-54 (1996)
- 5) 小島覚：NEWTON BOOKS カナダ, 教育社, 東京 (1986) PP.33-51
- 6) カナダの森林、木材生産と環境保全, 熱帯林行動ネットワーク編, 熱帯林行動ネットワーク, 東京 (1994) P.4
- 7) 手束平三郎：欧米諸国の森林・林業。森林政策研究会編, 日本林業調査会, 東京 (1988) P.43